

俳句雜誌

空

空

令和4年7月20日発行

第20巻7号

通巻第102号



2022・7

SORA 102号

空集抄 柴田佐知子抄出

闇汁に溺れさせたまきもの入るる

高倉和子

鮫鱈の胃の小魚を喰はさるる

角野良生

了解と海豚は跳んでみせにけり

中田みなみ

神仏も数に加へて雑煮餅

原友子

風邪の子へ医師よりごほうびのシール

吉田悦子

波裏に巻き込む冬日鳶の声

深川淑枝

石垣は天守に仕へ去年今年

戸栗末廣

海底の石拾ふごと海鼠捕る

坂口学

たましひの抜けてしまひぬ春炬燵

石橋幾代

寒鯉の水を揺らさずすれ違ふ

曾根富久恵

セーターを被り泣き顔見せぬ子

押田裕見子

日に透けて背開きの鮫真珠色

河原敬子

夜神楽の神たつぷりと睦みあふ

永淵恵子

水平は眠りをさそふ浮寝鳥

山本則男

庭師去るウッドデッキに柚子残し

今井康子

あたたかや抱きたる犬の耳ひらひら

田中とし江

引き抜ける目刺の藁の気丈なる

中村瑞枝

冬椿今際の言葉「もういいは」

井上和子

青空の大舞台なり梯子乗り

松田明子

流木に足掴まるる出水かな

吉田 稗

帰り花どこへ行つても一人かな

森田明成

白菜の盗られし畑に巡查立つ

三井所美智子

枯れ山は原始の色に鳶の笛

兒玉充代





恵方より幼子の声あがりたる
遊ぶ子に猟銃の音ひびきたる

大西乃子
えとう樹里

聖女にも闇はあるらむ虎落笛

牧康子

振り向きて富士と別れる冬の町

林れい

鳥帰る島にあまたの耶穌の墓

林徹也

狐火や母はたびたび騙されし

山田正子

山眠る火はとろとろとカッポ酒

倉智万数雄

割箸の真つ当に裂け寒の晴

田岡千章

隣り合ひ茹で卵むく花見かな

星加鷹彦

寒風やふいにぎゆうつと抱きつく子

仲里奈央

跨ぎたる露草は野の潮だまり

野中みのり

人生は途中で終る冬銀河

横田敬子

冬めくや病める身さらしバスを待つ

杉本美どり

春寒の菜屑の山へまた雀

高畑桂

あらたまや塵ひとつなき常の道

早田保子

着ぶくれをすし詰めにして列車発つ

岩下きぬ代

亡き人を詠む歌を読む二月かな

青木朋子

冬紅葉戦ありしはこの辺り

岡村尚子

わが闇はここぞとばかり浮寝鳥

佐藤和弘

古書市の城址に長居文化の日

荷宮克代

雪吊りを映す晴間の水鏡

附出勇人

薫風の遙かに戦車卵割る

玉陽子

薫風や家族それぞれ予定有り

後藤園子

大つごもり葉で今も生きてをり

畑由子

凍み豆腐からから揺れて夜の山

石井みゆき

雀早や注連縄の穂を見つけたり

岩井京子

冬ざるるもの一つに己が身も

空箱にしまふ空箱十二月

水鳥の日向の色となりにけり

福岡 高倉和子

鮫鱈の胃の小魚を喰はさるる

かごめかごめ言ひ当てらるる雪女

東京 中田みなみ

柚子湯出し母の手足を敬へり

了解と海豚は跳んでみせにけり

闇汁に溺れさせたきもの入るる

海豚らの見送り厚き硝子越し

何代も継ぎし睨みや初芝居

仲見世の幅に散りたる初吟行

福笑ひ踏まれしやうな顔となる

熊手売福搔き寄せて見せにけり

探梅の石段高き城址かな

竹人形春へ一步の膝の節

たましひは月に預けし平家蟹

福岡 角野良生

神仏も数に加へて雑煮餅

千葉原 友子

気乗りせぬ年もあらうに神の旅

神棚に榊あをあを嫁が君

焚火より蹴出すしぶとく燻るもの

白骨の流木冬夕焼が染む

仏壇の花の永らふ寒さかな

初神楽笛にたまりし息霰

洗はるる順番待ちの泥大根

飯に卵割る初夢は早や忘れ

新大豆選るや十指の力抜き

石垣は天守に仕へ去年今年

広島 戸栗末廣

風邪の子へ医師よりごほうびのシール 直方 吉田悦子

冬の鯛はがねのやうに反りかへる

鬼ごつこの声響く寺日脚伸ぶ

冬の濤見てみて肚の決まりけり

晩学は果つることなし冬銀河

長々と貨車過ぐる音氷張る

来てまづはすり傷見する年賀の子

きゆうと鳴く海鼠の愚痴を聞いてやれ

誕生日の夫と立ち寄る鯛焼屋

天狼や船擦れあふ闇があり

北州 坂口 学

大店の解体の地に水仙花

寒稽擬古潮蹴とばして終はりけり

波裏に巻き込む冬日鳶の声

北州 深川淑枝

海底の石拾ふごと海鼠捕る

日の鳴を遠くに見つつカレー食ふ

前後ろ分からぬままに海鼠突く

初日いま雫して海離れたる

糸切歯をこりつと逃ぐる海鼠かな

だんだんに躰ふくるる日向ぼこ
梵鐘の内なる煤も払ひけり
男衆の声を掛け合ひ雪下し
適役と言はれて鬼に節分会

直方 石橋幾代

着ぶくれて獣みさうな径通る
セーターを被り泣き顔見せぬ子よ

たましひの抜けてしまひぬ春炬燵
冬怒濤意志あるごとく襲ひ来る
北州 河原敬子

喧嘩独楽傷深くつき勝ちにけり
竹串で背より広げて鮫を干す

初明り島国に住み海見えず
竿に吊る鮫百匹や朝日差す

直方 曾根富久恵

寒鯉の水を揺らさずすれ違ふ
日に透けて背開きの鮫真珠色

暗き絵馬ごと絵馬堂の凍りけり
あちこちに膏薬貼りて寒の入

掘れば土器出てくる河原冬ひばり
門松の男結びも薩摩ぶり
福岡 永淵恵子

冬あたたか古地図の山はなだらかに
初夢の角隠しとるところまで

古壁のいつもの釘に新暦
夜神楽の神たつぷりと睦みあふ

北道 押田裕見子

極楽へ続いてゐるや雪野原
夜神楽の鬼の大きな喉仏

夜神楽の鬼の大きな喉仏

語られぬ血族ひとり冬銀河
紅梅や猿の居座る寺の屋根

水平は眠りをさそふ浮寝鳥
大根を埋けたる畝のふくらめり

本府 山本則男

能の灯の深雪の上にこぼれをり
木の影の地に蒼くあり春の雪

礎石野の日の平らなる初あかね
春泥にまみれてをりぬ歩み板

思ひ出すことありてより葛湯とく
足先で春のストーブ押しやりぬ
兵庫 中村瑞枝

その時間ならふくろふと一緒でした
引き抜ける目刺の藁の気丈なる

庭師去るウッドデッキに柚子残し
隣との境あきらか畦を焼く

東京 今井康子

幅狭き都会の川や鳥帰る
まんさくや備中鍬の柄の瘦せて

人形に疲れの見ゆる暖房裡
田の神のぶ厚きしやもじ雪解風

煮凝や地震かと顔見合はする
冬耕の畝垂直に土の照り
大阪 井上和子

まづ深く息して包丁始かな
鳥除けに空缶吊す冬菜畑

あたたかや抱きたる犬の耳ひらひら
伐採の山衰ふる冬夕焼

岡垣 田中とし江

霜の夜や百寿の叔母の訃報受く
冬椿今際の言葉「もういいは」

人も街も黒ずんでゆく十二月
暮し向き見えて親しや冬ともし

白むまで歩かされたり兎狩

熊本 松田明子

大病経てより健やかに実千両

柵のなき島の牧場も閉ざしけり

けういくとけうやう大事一葉忌

福岡 三井所美智子

雪吊や空を絞りて揺るぎなし

子の暮し親の暮しや走り蕎麦

風荒き干拓の地に藺を植うる

白菜の盗られし畑に巡査立つ

青空の大舞台なり梯子乗り

大寒や公園整備の砂あまた

何ごともなざぬ贅沢つばき餅

粕屋 吉田 稗

極月や女松の幹のうろこ立ち

北州 兒玉充代

花つつき眼白にこにこしてゐたる

老人の笑ひ短かき寒波かな

流木に足掴まるる出水かな

枯るるもの枯れて遠くの電波塔

すててこの父は朝より石のごと

枯れ山は原始の色に鳶の笛

帰り花どこへ行つても一人かな

大鷲城 森田明成

兵庫 大西乃子

恵方より幼子の声あがりたる

朝礼の冷氣きりりとビル現場

追伸の一語が本音明日は雪

朝礼の白き息吐くヘルメット

きのふとは違ふ波音日脚伸び

振り向きて富士と別るる冬の町

遊ぶ子に猟銃の音ひびきたる

兵庫 えとう樹里

初山河父の大島紬着て

兵庫 林 徹也

温室の花の呼吸のうづにをり

賀状来るゆつくり生きていますよと

梟が首を回せば厄日去る

音信の絶えし恩師へ賀状書く

雪原に墓の頭まばら更に降る

鳥帰る島にあまたの耶穌の墓

寒肥を施す少し剪りつめて

直方 牧 康子

飾売畳一枚ほどの店

東京 山田正子

聖女にも闇はあるらむ虎落笛

狐火や母はたびたび騙されし

貧しさも良し犬と寝る冬日向

まばたきて童話聞く子や暖炉燃ゆ

ストーブに薪投げ入れて想ひ断つ

山眠る火はとるととカッポ酒

糸田 倉智万数雄

朝日浴び湯気立つ幹や寒桜

東京 林 れい

白髪の頭の中を野分吹く